

**大津市中心市街地活性化基本計画に対する
提 言 書**

大津市活性化フェニックスプラン2007

平成19年3月

**大津商工会議所
中心市街地活性化協議会**

大津市中心市街地活性化基本計画に対する提言書目次

はじめに～提言に際しての基本的な立場と提言の骨子	1
0-1. 協議会の基本的な立場	1
○前提	
○活性化の2つの定義	
0-2. 大津市への要望	1
○中心市街地活性化計画への位置づけ	
○法定協議会設立への取り組み	
0-3. 提言の骨子	2
1. 観光による集客を軸とした活性化を進めるべきである	
2. 琵琶湖ウォーターフロントを含めたエリア設定を行うべきである	
3. 広域ネットワークの要としての機能を備えた中心市街地の形成を進めるべきである	
4. 環境と共生し、環境を学ぶ場としての市街地形成を進めるべきである	
5. 大津港湾の空き地について、明確な方向を打ち出すべきである	
1. 協議会からの問題提起	4
問題提起1. 大津市の中心市街地は本当に空洞化しているのか？	
問題提起2. 今ある資源はどういう意味があり、どう活かしたいのか？	
問題提起3. なぜ大津・浜大津地区なのか？	
2. 活性化のビジョンと6つの方針	8
2-1. 活性化の目標と基本的な方向	8
○目標	
○基本的な方向	
2-2. 6つの方針	9
方針1：ゲートゾーンにふさわしい、景観と機能を備える	
方針2：湖岸ゾーンの魅力を最大限に生かす	
方針3：3つのゾーンの魅力を高め、楽しく回遊できるまちにする	
方針4：中心市街地を中心に、大津を観光・コンベンション都市にする	
方針5：中心市街地から情報を発信する	
方針6：多様な参加を呼び込む仕掛けをつくる	
3. 活性化のための4大プロジェクト	11
1. 琵琶湖ウォーターフロントの活性化 ～琵琶湖～	
2. 大津ゲートゾーンを要とした大津観光ネットワークの活性化 ～広域ネット～	
3. 暮らしと観光の場としてのまちなか活性化 ～まちなかし～	
4. 「環境体験学習」のメッカとしての地域活性化～環境～	
4. 計画の推進に向けて	17
1) 組織と役割	

【資料】

- データで見た大津市の現状
- 大津市行政が考える中心市街地とその取り組み
- 大津市中心市街地商店街 意識調査結果のまとめ

■はじめに ～ 提言に際しての基本的な立場と提言の骨子

○本提言書は、現在大津市が策定を進めている「大津市中心市街地活性化基本計画」に対する、大津商工会議所からの提言をまとめたものである。

○本提言書をまとめるにあたって、大津商工会議所地域振興委員会のメンバーをはじめ、市民、学識経験者、専門家からなる「大津商工会議所中心市街地活性化協議会」（以下、協議会という）を設置して協議を重ねるとともに、中心市街地の事業者や商工会議所構成員に対してアンケート調査を実施し、これらの成果をふまえてとりまとめを行った。

0-1. 協議会の基本的な立場

1) 提言をまとめるにあたっての前提と「活性化」の定義

○本協議会では、以下の3点を提言に際しての前提とし、「活性化」を2つの視点から定義する。

【前提】

- ① 今回の提言は、国から支援を受けられるものでなくてはならない。
- ② 今回の提言は、広く市民から共感を得られるものでなくてはならない。
- ③ 今回の提言は、実効性のあるもの（数値目標設定等）でなくてはならない。

【活性化の2つの定義】

① 地域経済としての活性化

- ・ 大津市に住んでいる人が、大津市でお金を使ってくれること
- ・ 大津市に住んでいない人が、大津市でお金を使ってくれること

② 大津が好きというマインドとしての活性化

- ・ 大津に今住んでいる人が、ずっと住みたくなるということ
- ・ 大津に住んでいない人が、大津に何度も来たくなるということ

○以上の3つの前提と2つの活性化の定義に合致しないものは、中心市街地活性化計画に載せるべきではない。

0-2. 大津市への要望

1) 提言の「中心市街地活性化計画」への位置づけ

○本提言の内容を、中心市街地活性化計画に最大限取り入れられるよう、要望する。

2) 法定協議会設立への取り組み

○中心市街地活性化計画の採択の大きな要件のひとつとなっている「法定協議会」の設立に向けて、大津商工会議所をはじめとする民間との連携・協働・調整に最大限の努力を払われることを要望する。

0-3. 提言の骨子

○以下に提言の骨子を示す。

1. 観光による集客を軸とした活性化を進めるべきである

- 大津市は昭和33年に「大津国際文化観光都市建設に関する決議」を行った。歴史的、文化的、観光的に重要な地位を有しており、麗湖琵琶の景勝と共に、京都、奈良に比肩する文化観光資源を保有する都市である。
- 平成15年10月には全国で10番目の「古都」に指定され、自然と歴史に配慮した景観形成の取り組みが進められている。
- 中心市街地内やその周辺に存する観光資源を有効に活用することはもとより、広域エリアに点在する観光拠点とのネットワークを一層高めることによって広く国内外からの集客を図り、中心市街地の活性化を進めるべきである。

2. 琵琶湖ウォーターフロントを含めたエリア設定を行うべきである

- 中心市街地のもっとも大きな観光資源は、日本一の湖琵琶湖である。とくに、商業観光施設や文化施設などの都市機能の集積と、大きく広がる湖面とが、なぎさ公園を挟んで広がる様は、わが国では他にみることはできない。
- 中心市街地の集客力を高めるために、この琵琶湖ウォーターフロントが有する魅力を最大限に生かすべきである。
- そのためにも、現状の中心市街地活性化基本計画では含まれていない湖岸ゾーンを、中心市街地活性化の区域に是非とも入れるべきである。

- さらに、中心市街地エリアに膳所地域を含めるかどうかについて、協議会では次の2つの意見があることを付記しておく。
 - ① J R 大津駅から浜大津一帯を中心市街地とし、重点的に活性化を図る。膳所地域は中心市街地とネットワークする地域と位置づける。
 - ② 義仲寺や膳所公園が位置し、さらに城下町としての町割や街並みが現在も残る膳所地域までエリアを拡大し、集客性を高める。

3. 広域ネットワークの要としての中心市街地の充実を進めるべきである

- 中心市街地への集客の効果を、市内のほかの商業拠点や観光拠点に波及させ、大津市全体の活性化を図ることが肝要である。
- このため、大津市全体の観光商業のゲートゾーンとして、また、広域ネットワークの要として、中心市街地の充実を進めるべきである。
- 大津市の玄関口となる J R 大津駅、浜大津一帯、大津港、名神高速道路大津 I . C . などで、情報拠点としての機能向上やゲートゾーンにふさわしい風格と魅力ある景観の形成に努めるとともに、交通ネットワーク拠点としての充実を進めることが必要である。

4. 「環境体験学習」のメッカを目指すべきである

- 滋賀県は環境熱心県として、環境に関わるさまざまな取り組みを積極的に進めている。
- 琵琶湖を抱える滋賀県にとって、とくに「水」に関わる環境は大きなテーマであり、大津港を母港とする「うみの子」は、県内の小学生を中心に貴重な湖上環境学習の場を提供している。滋賀県琵琶湖環境科学研究センターや対岸に位置する琵琶湖博物館なども、環境について学ぶことができる先端的な施設である。周辺の里山や比良・比叡を中心とする山の環境や、町家にみられる暮らしにおける環境への配慮なども体験することが可能である。
- こうした取り組みや立地環境を生かして、広く全国の子どもを対象にした「環境体験学習」のメッカをめざすべきである。環境学習船での湖上環境学習を柱にした修学旅行地として、全国から修学旅行生を受け入れていくことも考えられる。
- こうした取り組みと併行して、環境と共生する先進的モデル中心市街地の形成を市民参画で進めることも必要である。

5. 大津港湾の空き地について、明確な方向を打ち出すべきである

- 大津港湾に広がる県有地は、中心市街地の活性化を進めるうえで、極めて貴重な土地である。
- その空き地の活用方法について、広く市民の声を聞きながら、早期に方向を打ち出すべきである。
- 協議会ではこの空き地について、大型バス駐車場、市庁舎移転、空き地での多目的活用という3つの意見に分かれている。

■ 1. 協議会からの問題提起

○中心市街地活性化基本計画を策定するに際して、現状の問題点の把握・分析や対策に関する検討は十分なされているだろうか、という危惧から、以下の3点について問題提起を行う。

■問題提起1：「大津市の中心市街地は本当に空洞化しているのか？」

- まちづくり3法改正の背景のとおり、大津の中心市街地は、現在本当に空洞化しているのか？
- 住民にとって近隣都市、京都・大阪への交通アクセスも良く、市内での消費の選択肢、福祉施設など生活基盤も揃っており十分住みやすいのではないかと？
- 新住民が増え続ける大津市は、活性化しているのではないかと？
- 商業者も経済活動を通じての生活に本当に困っているのか？
- 活性化した中心市街地とは、どういう状態のことなのか？
- 中心市街地のあり方・方向性・ビジョンがあるのか？
- ビジョンは具体的な開発・事業に活かされてされているのか？



◇現状のままでは、近い将来に危機的な空洞化を招くことが予想され、地域住民の満足度を高めることが必要である

- 大津市の中心市街地ではマンションの建設が続くなど、現状では人口の大幅な減少は見られない。商業の一定の集積もあり、商業者の生活も成り立つ程度に売り上げも伴い、他の地方都市と比較して危機的状況ではないと考えられる。
- しかし、地元購買率は彦根に比べて10ポイント以上も低い。さらに、2007年春に京都ヨドバシカメラ出店、2008年春に草津ヘイオンモール出店と京都駅前八条口再開発などが予定されており、他地域への購買流出が今後さらに進み、近い将来に危機的な空洞化を招くことが予想される。さらに、大津市総合計画では平成29年をピークに大津市の人口が減少へ転じると予想している。
- これらのことを考えると、体力のある現時点から大津市の生き残りをかけた独自のプランを立案、実行することで、近い将来に迎える危機的状況に対処することが重要である。
- 地域住民にとっても、中心市街地は交通アクセスもよく、公共施設・福祉施設などもあり、琵琶湖や比叡山・比良山の景観、旧東海道の町並みや大津百町の町家など、文化・景観に愛着を持てる素地がある。これに、商店街が中心となって地元購買率を高めるよう努力することで、さらに住環境の充実が図られ、大津の中心市街地に愛着を持った住民を増やすことが可能となる。自らが地域の住環境を維持・継続活用していこうとする意欲が生まれ、人口の郊外流出に歯止めをかけながら、コミュニティーやまちなかの文化を継承することができると考える。

■問題提起2：「今ある資源はどういう意味があり、どう活かしたいのか？」

- 中心市街地に今ある資源として、町家や社会教育会館が挙げられているが、誰に対してどんな価値があるのか？三井寺・疏水・琵琶湖はどうか？
- これらの資源を今後どう活かしたいのか？観光の視点で対策が十分検討されているのか？京都・大阪のベッドタウンとして人口が増加し、住民に快適なまちづくりだけでいいのか？大津が観光を捨てるとうなるのか？
- 全国へのPR不足、観光団体の連携や統一的な動きが不足していないか？
- 中心市街地の範囲は、三井寺やなぎさ公園を含まないでいいのか？
- 比叡山・石山寺・雄琴と観光連携しないで、大津・浜大津への観光集客はできるのか？



◇「大津市全域での観光商業ネットワーク化で活性化を目指す」

- 大津には、たとえば琵琶湖・比叡山延暦寺などの全国ブランドの拠点があり、さらに全国区ではないものの、坂本・雄琴温泉・大津京跡・三井寺・疏水・なぎさ公園・旧東海道・石山寺などのそのほかの歴史・文化・自然・環境スポットが多数挙げられ、観光関連事業所が全体の16%を占めている。
- これらを連動させることによって、観光地としての厚みや奥深さを感じさせ、大津ブランドを確立することが可能となる。それによる観光集客の経済効果は、大きな潤いをもたらすことになる。

■問題提起3：「なぜ大津・浜大津地区なのか？」

- 中心市街地はなぜ大津・浜大津地区なのか？
- 大津市全体に対する中心市街地が果たす役割は検討しなくてよいか？
- それを検討しないで、広くコンセンサスは得られるのか？コンセンサスがなくて実行できるのか？
- 大津・浜大津地区のみの活性化策で、大津・浜大津地区は活性化するのか？



◇「大津市全域の観光商業のゲートゾーンとして、大津・浜大津地区を位置づけた活性化策を考えないといけない」

1) 大津・浜大津地区の特性

①大津市総合計画での「中心都市核」に位置づけられている

- ・平成19年4月策定予定の大津市総合計画基本構想では、琵琶湖岸に沿って立地する「堅田、坂本、西大津、大津、膳所、石山、瀬田」の7地域を「主要な鉄道駅を含み、一定のまとまりと交流機能をもつ拠点的な地域」である都市核と位置づけている。
- ・このうち、「大津・浜大津、膳所、西大津」の3つの都市核が連なる地域を『中心都市核』と位置づけ、中枢的な都市機能を充実し、相互の連携を強化する」としている。



大津市総合計画基本構想

都市構造図

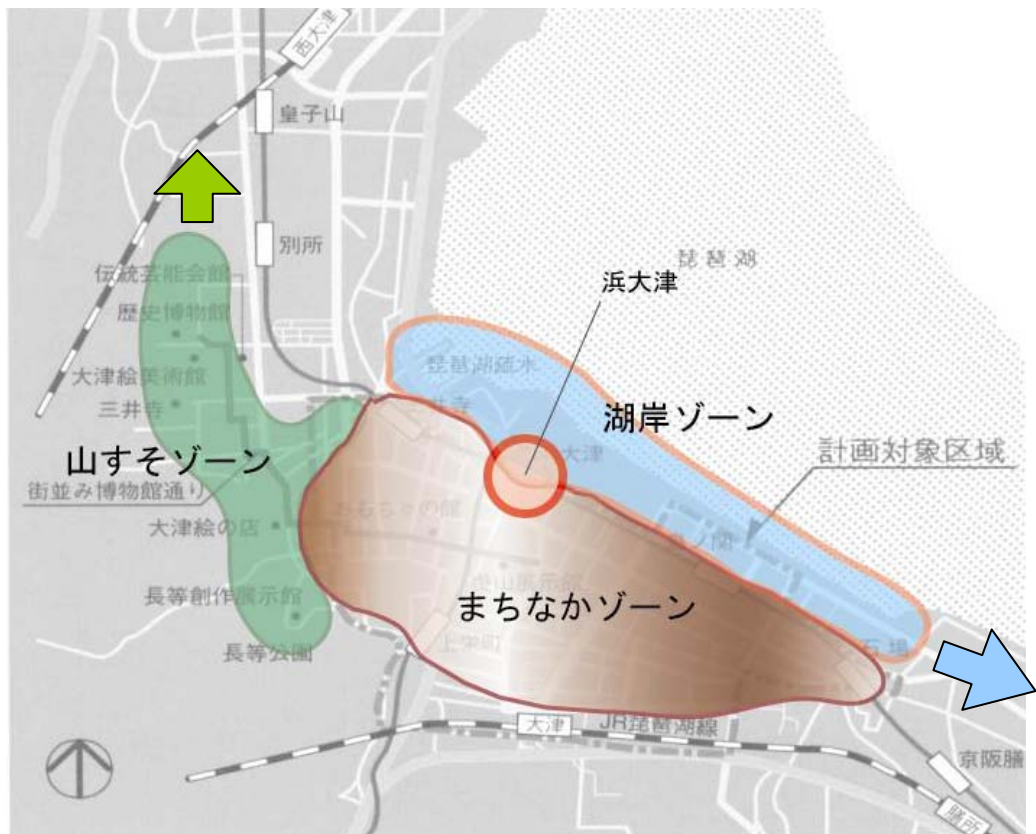
②大津のゲートゾーンである

- ・ごく近傍に名神高速道路大津インターチェンジとJR大津駅が立地し、自動車やJR線利用による広域からの来街者を受け入れる玄関口になっている。
- ・京都と大津をつなぐ京阪京津線と国道161号が大津・浜大津地区を通過している。浜大津で京阪石坂線や湖岸道路と交差しており、浜大津地区は京都と大津の各地域をつなぐ要となる位置を占めている。

③特徴ある3つのゾーンから形成されている

- ・大津・浜大津地区は、それぞれ特徴のある3つのゾーンから形成されている。

湖岸ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・琵琶湖岸には浜大津港やなぎさ公園が整備され、琵琶湖の風景を楽しみながら、石山寺まで歩いていくことが可能である。 ・なぎさ公園の背後には、商業施設、文化施設、宿泊施設などの都市施設が点在し、大きく広がる琵琶湖と都市機能とがなぎさ公園をはさんで立地する、わが国でも稀有の場が形成されている。 ・こうした恵まれた環境を十分に生かしきれていないことも事実である。
まちなかゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・城下町、宿場町、港町として栄えた大津のまちの中心部である。 ・ゾーン内には、町家や社寺によって形成された歴史的雰囲気や、落ち着いた町並みも散見することができ、大津祭なども行われている。 ・商店街も形成され、居住の場として、近年、マンション等の立地も盛んである。
山すそゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・緑豊かな山すそに、三井寺をはじめとする歴史・文化財や大津市歴史博物館などの文化施設が立地している。 ・緑豊かな落ち着いたきのあるゾーンである。



大津・浜大津地区の3つのゾーン

2) ゲートゾーンとしての魅力を高めるとともに、各ゾーンの特性を生かす

- 大津・浜大津地区を活性化させ、その効果を大津市全域に波及させるためには、ゲートゾーンとしての充実を図ることが必要であり、ゲートゾーンにふさわしい景観を形成し魅力を高めるとともに、情報及び交通のネットワークの拠点としての機能を高めていくことが必要である。
- 3つのゾーンについて、それぞれの魅力を高めるとともに回遊性を確保することにより、奥行きと広がりのあるエリアを形成していく。

■ 2. 活性化のビジョンと6つの方針

2-1. 活性化の目標と基本的な方向

【 目標 】

琵琶湖の恵みと歴史・文化を生かして、観光・商業の振興を図るとともに、豊かな暮らしが息づく快適で活気あるまちを育てる

観光客を暖かく迎える、 豊かな暮らし息づく湖都づくり

【 基本的な方向 】

琵琶湖という日本一の水辺と数々の歴史・文化資源を最大源に活かし、以下のことを実現する。

1) 大津独自の観光商業を柱に、地域経済の活性化を図る

- 琵琶湖や大津が有する歴史・文化資源を生かして、観光・商業の活性化を図る。
- 大津・浜大津地区を大津のゲートゾーンに位置づけ、他地域との連携、一体感を創出することにより、大津・浜大津地区を活性化させる。

2) 住民と来訪者の両者の満足度を高めるまちづくりを進める

- 中心市街地の住民が自分たちの住んでいるまちを誇らしく思い、来訪者には楽しさ・癒し・感動を与え続けることにより、すべての人の満足度を高めるようなまちづくりを進める。
- 滋賀県が取り組んできた「環境」に関する実績を生かし、「環境」をキーワードに広く人々が訪れる取り組みを展開する。

2-2. 6つの方針

上記の考え方を踏まえ、中心市街地の活性化に向けての6つの取り組み方針を提示する。

《基本的な方向》

1) 大津独自の観光商業を柱に、
地域経済の活性化を図る

2) 住民と来訪者の両者の満足度
を高めるまちづくりを進める

3) 「環境」をキーワードにした
取り組みを展開する

《6つの方針》

■方針1
ゲートゾーンにふさわしい、景観と
機能を備える

■方針2
湖岸ゾーンの魅力を最大限に生かす

■方針3
3つのゾーンの魅力を高め、楽しく
回遊できるまちにする

■方針4
中心市街地を中心に、大津を観光・
コンベンション都市にする

■方針5
中心市街地から情報を発信する

■方針6
多様な参加を呼び込む仕掛けを
つくる

■方針1：ゲートゾーンにふさわしい、景観と機能を備える

- 市外からの玄関口にあたるゲートゾーンの印象によって、観光客の大津への第一印象が形づくられることから、それぞれのゲートゾーンについて、それにふさわしい景観と機能を備える
- 周辺地域と連携することにより、大津市全体の観光客増加に資するよう、中心市街地の観光ネットワークの要としての機能を高める。

■方針2：湖岸ゾーンの魅力を最大限に生かす

- 琵琶湖岸は大津・浜大津地区が日本に誇ることができる場であり、集客施設の整備や環境を生かしたイベントの実施などによってその魅力を高め、湖岸ゾーンが有する可能性を最大限に生かす。
- 環境学習船による湖上環境体験学習を中心に、環境を学ぶ子供や大人を広く全国から受け入れる。
- 環境と共生するモデルとなるような、先進的中心市街地形成の取り組みを、市民参画で進める。

■方針3：3つのゾーンの魅力を高め、楽しく回遊できるまちにする

- 中心市街地を、広がりとお行きのあるエリアにするために、湖岸ゾーンとともに、「まちなかゾーン」と「山すそゾーン」の魅力を高める。
- 安全で快適な歩行者空間の整備や案内板の充実などにより、3つのゾーンを気軽に楽しく回遊できるようにする。

■方針4：中心市街地を中心に、大津を観光・コンベンション都市にする

- ゲートゾーンという立地と、琵琶湖岸などの豊かな環境を生かして、日本や世界から観光客を呼べるような、イベント、祭、会議、展示会などを開催していく。
- 既存のイベントを維持・発展させるとともに、中心市街地を舞台にした新たなイベントを興す。
- 観光・コンベンション都市づくりの推進体制をつくる。

■方針5：中心市街地から情報を発信する

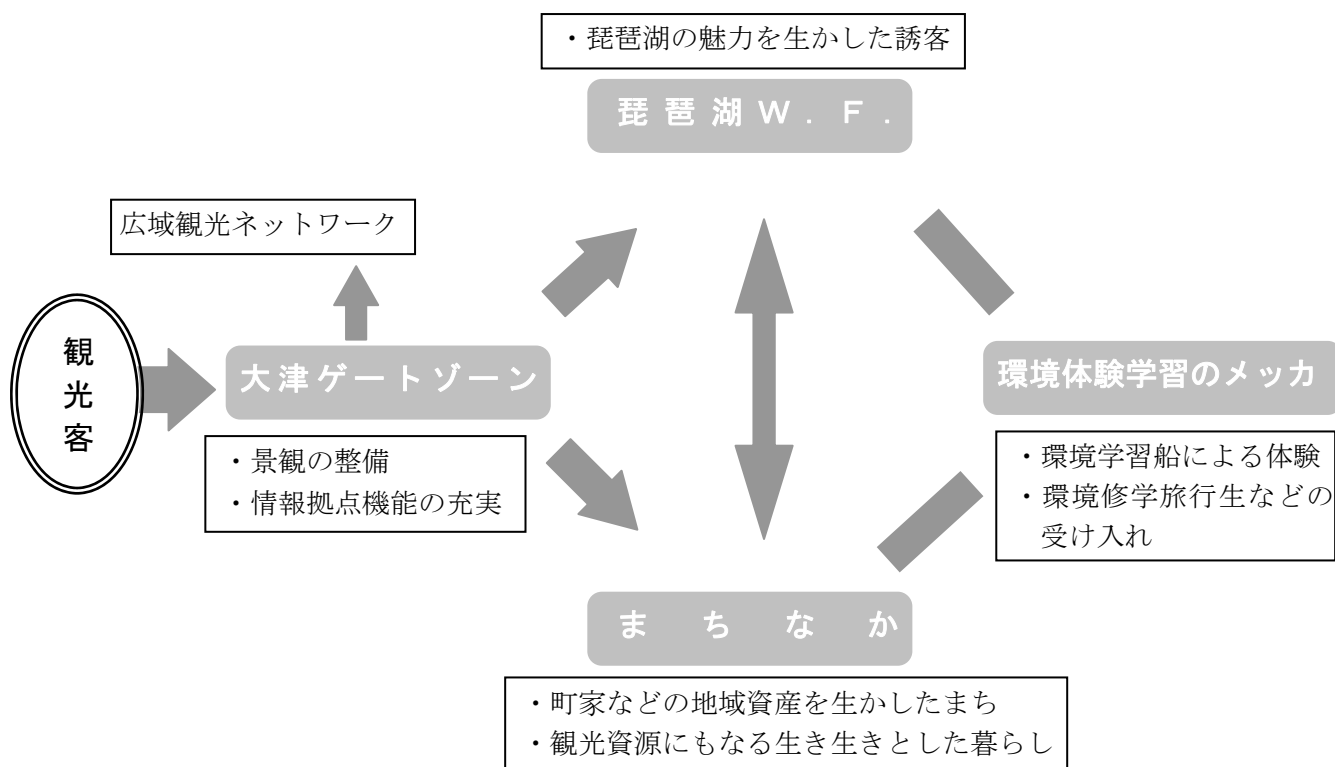
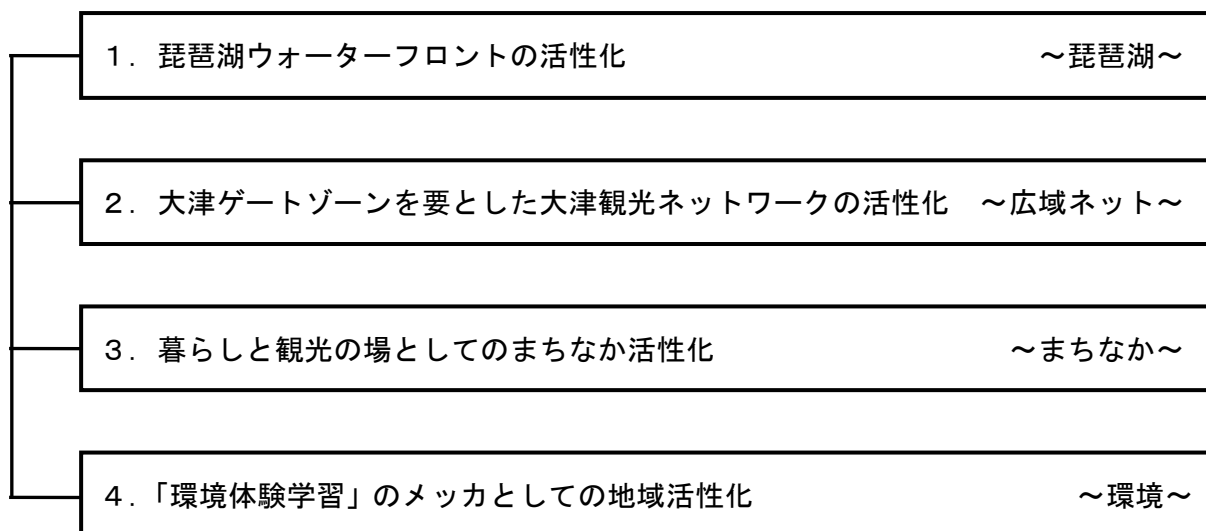
- 中心市街地の魅力を高めるとともに、その魅力を広くアピールするために、定期的にキャンペーンを実施するなど、常に情報の発信を行う。
- 中心市街地の集客力を高めるために、京都や周辺の観光拠点などとネットワークを形成し、広域の取り組みを行う。

■方針6：多様な参加を呼ぶ込む仕掛けをつくる

- 中心市街地活性化の担い手は、商店街、大型店商業者、関連事業者、市民、地区住民、観光協会、大津市、大津商工会議所など多彩であり、活性化に向けてそれぞれが自らの役割を自覚し、責任を果たすとともに、連携・協働を進める。
- 市民の多様な参加を呼ぶ仕掛けづくりを進める。
- 中心市街地全体で、観光客を暖かく迎え入れるホスピタリティを高める。(大津市民憲章には「あたたかい気持ちで旅の人をむかえましょう」とある)

■ 3. 活性化のための4大プロジェクト

- 6つの基本方針をふまえて、中心市街地の活性化に資する4大プロジェクトを提示する。
- さらに、4大プロジェクトを推進する事業を抽出するとともに、そのなかでも重点的に推進すべき事業を「重点事業」と位置づける。



- 琵琶湖ウォーターフロントは、「自然」、「水環境」、「気晴らし」、「癒し」、「交流・交歓」などのキーワードで語られる場であり、大津市民はもとより、観光客にとっても魅力ある空間である。
- 中心市街地に隣接してこうした琵琶湖が広がるという、わが国でも稀有の空間がもつ魅力と可能性を最大限に生かすことによって、国内外から広く集客を進める。
- このため、湖岸の魅力を高める集客施設の集積、景観の保全と形成、立地環境を生かしたイベントの開催などにより、その魅力を最大限に生かしていく。

【数値目標例】

・なぎさ公園入り込み客数 80万人（平成17年） → 100万人

【重点事業】**■市民や観光客が琵琶湖を一層楽しめるゾーンにするために、オープンカフェなどの拠点施設を整備する**

- ・琵琶湖の景観を楽しみながら飲食できる施設や、交流・交歓の施設などを湖岸ゾーンにつくる。
- ・大津港湾の空き地を活用する
- ・桜や紅葉などの植樹による「春・秋」の名所づくりや、歴史や文化施設などを生かした観光スポットを、湖岸ゾーンにつくる。

【その他の事業】

- なぎさ公園を主会場にした、市民参加型のイベントを開催する
 - ・「全国豊かな海づくり大会 びわこ大会」へ参画する
- ボート・ヨット・カヌーなど、湖上レクリエーションの場をつくる

2. 大津ゲートゾーンを要とした大津観光ネットワークの活性化 ～広域ネット～

- 観光客を迎える玄関口にあたるゲートゾーンの景観整備や機能充実を進めるとともに、周辺に立地する観光拠点とのネットワークを強化する。
- 名神高速道路の大津インターチェンジから大津の中心部に至る沿道景観、京都方面からの導入口にあたる国道161号沿道や浜大津駅周辺、大津港周辺、JR大津駅周辺などは、第一印象を形づくる特に重要な場であり、景観や立地機能などの整備・充実を進める。
- 中心市街地への観光客が石山寺・南郷方面、坂本・雄琴・堅田方面、比叡山方面など、周辺の観光地へ流れるように、インフォメーション機能の充実、バス交通によるネットワークの向上、イベントの連携など、周辺部とのネットワークを高める取り組みを進める。
- とくに京都との連携が重要である。京都への観光客が大津にも流れるように、京都での大津に関するインフォメーション機能を高める。

【数値目標例】

・観光客入り込み数 1,070万人（平成17年） → 1,200万人

【重点事業】

■ゲートゾーンや交通拠点の景観整備を進める

- ・大津インターチェンジから中心市街地にいたる主要道路の沿道景観
- ・国道161号の浜大津～栄町間の沿道景観（電線類地中化など）
- ・京阪浜大津駅周辺
- ・JR大津駅周辺

■情報拠点としての機能を充実させる

- ・JR大津駅、京阪浜大津駅、大津港
- ・情報の積極的な発信

【その他の事業】

- ネットワークの拠点としての機能を高める
 - ・浜大津駅や大津駅を中心とした路線バスの利便性の向上
 - ・浜大津駅や大津駅を起点とした定期観光バスの充実
 - ・琵琶湖湖上観光とその他の観光拠点をつなぐ観光ルートの開発
 - ・京都との連携を高めるための拠点を京都に設置
- 琵琶湖湖上観光とその他の観光拠点をつなぐ観光ルートの開発
 - ・ex. 長浜～大津（琵琶湖ホール）
- 斬新なデザインのバスを導入する
 - ・山鉾型2階建バスの導入
- 観光・コンベンション都市づくりの体制確立と推進
- 「大津へ行こう」キャンペーン（市外向け）の実施

- 「観光はまちを元気にする」キャンペーン（市内向け）の実施
- まちなか情報新聞（タウン誌）の定期発行
- メールマガジンの配信

3. 暮らしと観光の場としてのまちなか活性化

～まちなか～

- 地域の住民が、快適で生き生きと暮らせることが何よりも大切である。地域の資産を生かした、豊かで活気ある暮らしが繰り広げられるまちは、それ自体が観光の対象にもなる。
- 中心市街地を、広がりとお興行のあるエリアにするために、「まちなかゾーン」の魅力高める。
 - ・町家、町並みを保全することにより、大津の歴史・文化を伝える、落ち着きと味わいのある暮らしの場を形成していく。こうした取り組みは、これからの高齢化社会に対応したまちを創っていくことにも符合し、その取り組みは観光客にとっては非日常の魅力あるものである。
 - ・町家の商業施設としての活用、空地のパサージュ化などを進める。
 - ・大津の伝統である大津祭を広くアピールすることにより、大津町民の伝統と心意気を伝えるような祭りにしていく。
 - ・買物と交流の場である商店街を、活気と魅力ある場にしていく。
- 住民や観光客が、「湖岸ゾーン」、「まちなかゾーン」、「山すそゾーン」を気軽に回遊できるように、安全で快適な歩行者空間の整備を進めるとともに、マップの作成や案内板の設置、ゾーンをつなぐ多彩なイベントの開催などに取り組む。

【数値目標例】

- ・町家保全、再利用の数値目標化
- ・空店舗率一桁への数値目標化

【重点事業】

- 町家が形成する歴史的町並みの保全・修景・整備と、空町家の活用を進める
 - ・空店舗や空町家を活用して、集客力のある店舗の誘致を進める
 - ・空町家を活用して、町家体験館や観光情報センターを整備する
- 空き地を生かしたパサージュの整備を進める
 - ・まちなかに存在する低未利用地を活用して、パサージュ（路地空間）を整備し、まちとしての魅力を高める。
- 歩行者空間の整備や沿道景観の整備を進める
 - ・安全で快適な歩行者空間の整備や自転車レーンの確保を進める。
 - ・電線類の地中化や沿道景観の整備を進める。

【その他の事業】

- 歩いて巡る観光モデルルートの設定
- 「旧東海道・大津宿」の再生

- 「大津のお宝」認定事業の実施
- まちかど博物館（写真展・展示会等）の設置
- まちなか居酒屋構想の推進
- 地域素材（商品）を生かしたイベントの開催
- フリーマーケットの開催

- 案内標識の充実
- 観光マップ、まち歩きマップ、福祉イラストマップやガイドブックの一体的整備
- ガイドステーションの設置する
- ITを使ったガイドシステムの構築
- 定期開催型まち歩きツアーやスタンプラリーの実施
- 「手ぶらで大津観光サポート」のシステムの確立
- 割引クーポン券、大津ぶらり手形、共通利用券・共通入場券などの発行
- レンタサイクルステーションの整備
- 特産品の製造工程の見学会や製造体験会の開催

- 観光コミュニティビジネスの支援
- 大津入門講座の拡充
 - ・市「大津まちなか大学」／JC「大津っ子検定」
- 幼児・児童の「おつかい体験」の実施
 - ・教育機関とタイアップした社会体験、教育
- 買い物サポートシステムの充実
 - ・町のオアシス：高齢者、身障者などを対象とした支援システム
- ポイントカードの充実
 - ・市商連「すみれカード」の積極的活用
- 一店逸品運動の展開
 - ・店のこだわり商品、サービスの発掘
- 地域通貨の充実
 - ・えびす講：大津のみで使えるオリジナル通貨（銀行とタイアップ）
- 匠の技教室の開催
 - ・店主による熟練された技を用いた体験教室
- シルバーショップの開設
 - ・高齢者による主体的な店舗運営
- 熟年サロンの開設
 - ・団塊の世代を対象とした、情報交換、生涯学習の場づくり
- 専門ガイドの育成と派遣システムの整備
 - ・びわ湖大津観光ボランティアガイド協会・坂本ボランティアガイド協会の機能強化
- あたたかい気持ちで観光客を迎える市民意識の啓発

- 環境への取り組みは、21世紀における地球規模の課題であり、滋賀県は、「水」を中心に環境への取り組みを積極的に進めている。
- こうしたこれまでの取り組みを生かしながら、船上での環境体験を中心とした環境体験学習の機会を提供することにより、「環境体験学習」のメッカを目指す。
- 湖岸ゾーンの北側に隣接して位置する滋賀県琵琶湖環境科学センターや湖上交通で結ばれた対岸の琵琶湖博物館などと連携して、環境を学ぶ場と機会を提供する
- 湖岸に、水の環境を身近に感じることができる装置の設置や、水辺ウォーク大会、水辺サイクリング大会を実施する
- 環境と共生する先進モデルとなるような市街地形成を進める

【数値目標例】

- ・環境体験学習参加者数の数値目標化

【重点事業】**■環境学習船を建造する**

- ・現在就航している「うみの子」に加えて、新たな環境学習船を建造し、環境について学ぶ修学旅行生の受け入れなど、広く人々を受け入れる。

【その他の事業】

- 湖岸に、水の環境を身近に感じることができる装置などの設置
- 水辺ウォーク大会、水辺サイクリング大会の実施

- 太陽光発電やバイオエネルギーの導入
- 公共交通機関や自転車利用の促進
- 環境に負荷の少ない路線バスや観光バスの導入

■ 4. 計画の推進に向けて

1) 組織と役割

- 中心市街地の活性化に向けて、共通の目標とコンセプトのもとに取り組む全体事業については、中心市街地活性化協議会がその企画・調整にあたる。
- 具体の事業は、商店街、大型店商業者、関連事業者、市民、地区住民、観光協会、その他関係機関、大津市と大津商工会議所が、それぞれ単独に、あるいは連携・協働して、その実施にあたる。

